

旧友再会

男性自身・第三部



ツバメモ
モーニング

日友再会

男性自身・第三部

山口 瞳



新潮社



旧友再会

— 男性自身第三部 —

昭和四十二年七月十日 印刷
昭和四十二年七月十五日 発行

定価 三五〇円

著 者 山 口 瞳

発 行 者 佐 藤 亮 一

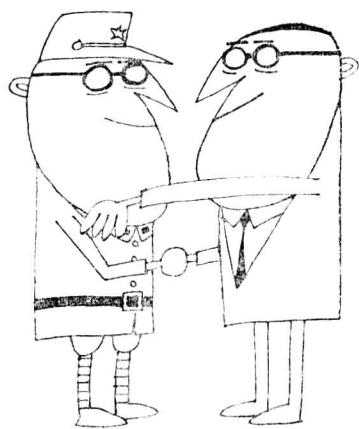
発 行 所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(20)二三番(大代)
振替 東京八〇八番

乱丁・葺丁のものはお
取替えいたします。

目

次



色紙 九

出処進退 一四

仕方話 一六

不平不満 二五

木製の椅子 二六

挽回 三五

煙草の火 四〇

なんのために 四五

梅林 五〇

牡丹燈籠 五六

背中を噛む 六二

心の故里 六六

春の海 七一

謎の怪人 六六

頭上の敵 六二

無くなる 六六

おふくろの味 六二

裸体 六六

青い日々 一一二

私の後悔 一〇六

山の木 一二

夏 二六

冷血動物 二三

田舎漢 二六

御祝儀袋 二三

鈴虫 二六

ダウト 二四

名前 一四

野球人口 一五

ラチカン 一五



寝耳に水 一六

火事場 一六

梯子酒 一七

考える人 一六

模範家庭 一八

夏子の失敗 一六

先生 一九

吉野秀雄先生 一六

貫いもの 二二

買いもの 二六



正月 三二

ある紳士 二六

焚火する男 三三

ねばならぬ 三七

間違い 三九

こわい 四二

噴水 四四

山本さん 四七

皿小鉢 五二

春の囃 五五

旧友再会 五七

旧友再会

——男性自身第三部——

色紙

年末になると、歳末助けあい運動とかで色紙がとどけられる。それに何かを書くとか誰かが買ってくださって、困っている人にお金がとどく仕掛けになっているらしい。

講演旅行にゆくと、やっぱり色紙を出されることがある。色紙はイロガミではなくシキシである。こうなると、いつも何か文句を考えておかなくてはいけない。

他人のつくった詩の一節や、俳句や、小説のなかの一部を書く人がある。うまいやり方であるけれど、これはつまり文章は他人のものであるから、書のうまいへたで挑もうとするようなもので、ちょっとおかしい気がする。書家ならいいけれど。

小さな丸をふたつ、大きな丸をひとつ書いて署名する人がいる。コマルコマル、オオイニコマルという意味だそう。照れ臭いのだろう。

いつだったか、旅館でサイン帖を見ていてびっくりしたことがある。高名な小説家の署名があった。そのうえに一文字「忌」と書いてあった。こういうことは、よほど齢をとるか、よほど若くなければできないだろう。私もずいぶん前に「一、金伍萬圓也、及び菓子一折り」と香燐帳みたいなことを書いたおぼえがある。照れ性のひとが考えつめると、こんなことになる。その高名な小説家



はその地方に講演にきたのだそう。壇上にあがって三十分間だまっていて「終り」と叫んで降りてしまったそう。凄（こわ）い先生だ。

梅崎春生さんが、あるところで講演することになった。十五分に値（た）ぎって壇にのぼって、ボソボソと恥（は）ずかしそうに喋（しゃべ）っていたが七分で終ってしまった。仕方がないので質問をうけることにしたが何も答えられなかった。その話もその土地の人から聞いた。梅崎さんはきつとその夜も大酒を飲んだろう。

梅崎さんは色紙に「勉強」と書いた。その色紙を中野重治さんが買ったという話を文芸雑誌で読んだ。とてもいい話だった。

講演のきらいな小説家がいる。その人はこう言った。

「講演というものは話を三つぐらい用意しておけば全国を渡り歩くことができる。簡単なものだ。そのうちに話がうまくなる。うけるコツがわかってくる。それが厭（いと）だ。繰（くり）りかえすことによってうまくなるという気持（きもち）がいやだ。小説家は創作をするものだ。講演と創作は両立（りやうりつ）しない」

色紙に何かを書くことが嫌（きら）いな小説家がいる。そのひとは講演旅行（こうえんりょこう）もしない。地方へ講演（こうえん）に行くことは、色紙を免（ゆる）れ得（え）ないのである。

*

*

北海道へ講演旅行へ行（い）ったときのことだ。ちいさな町での講演をおわり、出発（しゅつぱつ）まであと三十分というときに五十数枚の色紙を渡（わた）された。その町にふさわしいような、あたかもその町へ来て思（おも）いついたような文句（ぶんぐ）を考える時間（じかん）がなかった。

そこで、色紙に「マジメ人間」と書いた。どうせこれを貰（もら）っていた人（ひと）は一人一人（ひとりひとり）が違（ちが）うのだ

と思って同じ文句を書きつづけて、その横に私の名を書いた。そこへ、昼間、町の名所を案内してくださった運転手さんが、友達にあげるのだと言って三枚の色紙を持ってきた。これで、ほぼ六十枚になった。

昼のうえで中腰になって色紙を書きつづけ、四十枚になったところで、私は吹きだしてしまった。

町役場と高等学校の主催であるから、私の色紙は、町の有力者全員にゆきわたることになる。そういう人たちは、お互いの交際が頻繁であろう。もし、私の色紙が居間の鴨居カモイに掲げられたとするならば、おかしいことになる。

「あ、ありますな」

ということになる。

「マジメのジの字が、うちのやつとちよつとちがう」

そう思うかもしれない。

そうすると、私の色紙は「一陽来復」みたいになってしまふ。「成田山・交通安全」みたいになつてしまふ。

ちいさな町全体が、すべてこれマジメだらけというのは奇妙ではあるまいか。

*

*

博多のバーから電話がかかってきた。はじめに出た女性の声が、すぐT先生にかわつた。「実にどうも、だいそれたことをしてくれたな」

それですべてを諒解した。そのバーの女性に頼まれて色紙を書いたのである。東京の客も来ると

いうことが宣伝になるのだろう。そう思つて書いた。その女性にはいつも世話になる。色紙を書いてくれといわれたときに、私は、それはT先生にお願いすべきではないかと言つた。彼女は、T先生は絶対に色紙なんか書いてくれないのだと言つた。それはその通りなのだ。ほかの酒場で飲んで、もう一度そのバーに寄つたときに、新しく買ったのであらうと思われる五枚の色紙が文房具屋の包装紙につつまれて置いてあつた。客は一人もいなくて、パーテンドーがゆっくりと墨をすつていた。進退が谷^{あひ}まつた。色紙を辞退するのもある年齢に達しないと出来ないことである。私は色紙にマジック・インクで書くのはいやだ。あれは、ちよつとうまそうに書ける。それが厭だ。卑怯じゃないか。

そこで、書いたのである。いつかはT先生の目にふれることを承知して、書いた。

「いやあ、あきれかへつた奴だな」

「おどろいたでしょう」

「実に驚いた。キミはどうも、たいしたことをするひとだな」

「たいしたもんでしよう」

「だいそれたことをする奴だな」

ほんとにそうだ。

「……しかし、文句が気にいったから、今日のところは許してやる。だけど、いやあ、全く驚いた」

*

*

Kという小説家と一緒に京都のバーに行つたときも色紙を頼まれた。私はそのバーが好きだつた。それは短冊^{たんそく}だつた。Kが、そのとき「のるかそるか」という題名の小説を地方紙に連載してい

たので、私は短冊に「乗るか剃るか」と書いた。

半年経って、別の人とそのバーに行ったら短冊はガラスの額にはいつて飾ってあった。同行したひとは、

「乗られても、剃られても困りますね」と言った。それから、「この剃という字は違っていますね」とも言った。

「そんなことはないだろう」

私の書いた剃の字の、偏の弟の斜めの「ノ」が無かった。

「偏は弟でしょう」

「いや、そうじゃない。弟が剃るわけがないじゃないか」

「そうですかね」

家へ帰ってすぐ辞書を見た。私のつかっている辞書の「剃る」というところは、弟の「ノ」が欠けていた。永い間、私はそれが正しいと信じていたのだ。辞書の活字の「ノ」が欠けているのであって正しくは弟偏にリ（りっとう）であった。こころみに剃髪の項をみると、ちゃんと弟になっている。

「しまった！」

と思うが、どうにもならない。

私の短冊は、あのバーの入口にちかいあの場所にずっと飾られているのである。二年ちかく京都へ行く機会がない。私は、いまでも飛んでいつて「ノ」を書きいれたいと思っている。それを思うといえどもたつてもいられない。だから、色紙なんか書くもんじゃない。

出 処 進 退

昭和四十年のプロ野球ベナント・レースがはじまるまえに、巨人・西鉄のオープン戦を見にいった。試合を見ながら、私は十年もプロ野球を担当している新聞記者と、今年の新人についての予想を語りあった。

私は、最も優秀なのは慶応から東京へ入団した外野手の井石礼司であろうといった。六大学出身の投手では、やはり慶応の渡辺泰輔（南海）が抜群で、あのバーム・ボールは容易には打てないし、バックがいいから十勝、あるいはひょっとすると十五勝をあげるだろう。早稲田の宮本（巨人）、江尻（大洋）、法政の本原（近鉄）はどうもあまり期待がもてず、特に江尻はすぐに打者に転向すべきである。この三人よりはプロの投手としては東大の新治（大洋）のほうが面白いと言った。

高校出では下関商の池永正明（西鉄）が相当に活躍するだろう。上尾高の山崎裕之（東京）も緒戦で長打がでるようだとかかなり働くのではないか。

これに対して、野球記者は、

「井石は駄目ですね。渡辺も、君の言うほどには活躍できない。あとの六大学の投手は、だいたい

